

【研究論文】

女性たちによる自主運営アート施設の可能性  
—モントリオール市のラセントラル/  
ギャラリー・パワーハウスの例

Possibilités du centre d'artistes autogérés par des femmes :  
le cas de La Centrale/ Galerie Powerhouse à Montréal

矢内 琴江  
YAUCHI Kotoe

Résumé

Cet article se focalise sur les possibilités de La Centrale/Galerie Powerhouse d'éliminer la discrimination basée sur la différence entre les sexes et d'autres identités. Ce centre est autogéré par des femmes à Montréal depuis 40 ans. L'article ne se propose d'analyser ni son aspect artistique ni son aspect théorique sur l'art. Travaillant sur les publications de La Centrale, il a pour but de mettre au jour une action « concrète » dans une perspective féministe dans le milieu artistique. Alors qu'il existe toujours des actions artistiques dans le mouvement féministe au Québec, les études sur le féminisme québécois ont tendance à insister sur l'aspect socio-politique. Ainsi, l'auteure porte son attention sur La Centrale en tant qu'exemple d'une action collective menée par des femmes afin de modifier la culture discriminatoire dominante. Cette action se concrétise sous la forme d'une galerie, de multiples activités reliées à l'art, et de publications. Ces trois éléments interreliés permettent au centre de garder son dynamisme créatif à la fois dans sa pensée, ses actions, et sa vie communautaire. Ainsi, La Centrale contribue à la modification de la culture patriarcale et à la transformation sociale.

キーワード：フェミニズム、ジェンダー、アート、ギャラリー、エンパワメント

Mots-clés : féminisme, genre, art, galerie, empowerment

はじめに

本稿では、モンリオール市にある、ラセントラル／ギャラリー・パワーハウス (La Centrale/Galerie Powerhouse) がもつ、性差別や様々な差別を克服するための可能性について論じる。このギャラリーは、女性アーティストたちによって 40 年も自主運営されている。本稿で分析を試みるのは、このギャラリーの艺术的な側面における可能性でも、美術批評における可能性でもない。このギャラリーが出版しているドキュメントに着目して、出版というテキスト的な実践と、作品展やイベントといったギャラリーの主要なアクションが、どのような関係をもっており、それが、このギャラリーの展開にどのような役割を果たしているのかを考察する。それによって、既存のケベックのフェミニズム研究では、十分に着目されていない、文化的実践の現場における、性差別の克服と、女性たちの意識化への取り組みを明らかにする。

## 1. 問題構成—ケベックのフェミニズム研究における文化的側面の欠落

フェミニズムという言葉は、19 世紀末まで、フランスでは、女性的な性質をもった男性を示す病名として用いられていた。しかし、女性の市民権獲得運動が台頭し始めると、徐々に、女性の権利を要求するアクションという概念を指す語として、フランスだけではなく、ヨーロッパにも広まる。ケベックには 1896 年にこの語が入ってきた (Dumont et Toupin, p. 20)。しかし、この語を定義することは、必ずしも容易ではない。時代によってその意味は変化し、また、いくつもの思潮に分かれるからだ (Toupin, 1997 ; Guy, 1991 ; Descarries, 1988)。けれども、今日のケベック社会において、フェミニズムという語が、社会に対して 1 つの立ち位置を示す語であることに変わりはない。例えば、大学では、日本やアメリカとは異なり、女性学でも、ジェンダー研究でもなく、フェミニズム学 *études féministes* というコースが設けられている。フェミニズムという語によって、学問的かつ政治的立ち位置が示されている。それでは、ケベックにおいて、フェミニズムという語は、どのような意味を持っているのか。

フェミニズム学のパイオニア的な研究者であるユゲット・ダジュネ (Huguette Dagenais) は、フェミニズムを「いくつもの声／道筋からなる社会運動」として、次のように特徴づけている。

その目的は、公正かつ平等な社会をめざして、女性にとって抑圧的な性の社会的諸関係を根底から変革することである。女性は、まさに、この解放の運動の当事者である。しかし、この解放とは、単に、形式的な平等の追求や、一部の女性の特定の利益に限定され得ない (Dagenais, p. 260)。

女性の解放の社会・政治的側面に着目したダジュネの定義に対し、『ケベックのフェミニズム思想史論集 1900-1985 年 *La pensée féministe au Québec : Anthologie 1900-1985*』を編纂したミシュリンヌ・デュモン (Micheline Dumont) とルイズ・トゥッパン (Louise Toupin) は、フェミニズムを、性をめぐる権力の不均衡な関係性を問題の出発点とした、変革のプロセスとして捉え、次のように定義する。

男性と女性の間には、我々が望もうが望ままいが、生のあらゆる側面に組み込まれている従属関係という現実が、歴史的に存在する。フェミニズムは、この従属関係の (個人的な、しかしとりわけ集団的な) 意識化と、これを撤廃しようという意志と、性の社会的な諸関係を変えるための取り組みから生まれている (Dumont et Toupin, p. 22)。

この定義では、フェミニズムが女性たちの意識改革を基盤にしている点で、必ずしも、運動を政治社会的側面における取り組みとして理解しているわけではない。しかしながら、本書には、社会運動としてのフェミニズムに関わっていた女性たちのテキストが集められることになる。それは、本書がそもそも、「現場」で活動するフェミニストたちのテキストを選ぶことを基本軸にしていたからだ。

論集の構想の段階からこの企画の中心にあった、素材の選択の最初の基準とは、何よりも、活動家のテキストに注目することだった。つまり、具体的なアクションに尽力していたこれらの女性が、フェミニズムという場から行う実践を出発点にして話し、書いているテキストである。そこで、私たちは、外側からの観察者のテキストとは反対に、「現場」のフェミニストたちのテキストに特化することを望んだ (Dumont et Toupin, p. 24)。

けれども、私たちは、そもそも、「具体的なアクション」とは何か、「現場」とはどこなのか、そして、「活動家」とは誰なのか、「フェミニスト」とは誰

なのか、を問うことも出来るのではないだろうか。すなわち、なぜ、具体的なアクションは、社会運動や政治的変革と直結しなければならないのか、なぜ、「現場」は、女性またはフェミニズム運動団体や、関連施設に限定されるのか。そして、なぜ、それらに携わる人々だけが、従属関係を変えていくための具体的な取り組みをしていた、と言えるのだろうか。ところで、1970年代後半からケベックでは、社会学的な分析の視点から家父長制を抑圧のシステムとして問題視するラディカル・フェミニズムが中心的な思潮となった。その思潮を生んだ雑誌が、フェミニスト作家ニコール・ブロッサル(Nicole Brossard)が中心になって創刊された『石頭たち *Têtes de pioche*』である。その2号には、次のような言葉がある。

私たちが望んでいるもの、それは存在する権利。私たちは、スペースがほしい、生きるための、笑うための、愛するための場所がほしい。動くための、踊るための、発見するための、創造するための、もはや男性的ではなく、もはや男性性に結び付けられることのない、新たな生の様式を生み出す空間がほしい！ (*Les Têtes de pioche*, vol.2, n° 1, mars 1977, p. 1 ; reproduit dans *Les Têtes de pioche*, 1980, p. 85)

すなわち、女性にとっての解放とは、日常生活や社会生活において、男性と対等な権利を得るだけでなく、男性性に支配された意識、振る舞い、思考のあり方から自由になることそのものなのだ。文化そのものを根幹から問うことなしに、女性のみならず、男性もまた、自律した創造的な主体として存在し、他者と関係を結ぶことは出来ない。だから、フェミニズム運動は、既存の文化制度を問い直し、新たな文化のあり方を提示する実践を抜きに語ることは出来ないが、そうした個々の実践や、「空間」を作り出すための「具体的なアクション」について、これまでのケベックのフェミニズム研究が十分に言及してきたとは言い難い。ここで言う実践とは、創造性に関わる実践、とりわけアートに関連する実践のことである。

## 2. ケベックのフェミニズムにおけるラサントラルの位置づけ

この創造的な実践を可能にする場を生み出そうとしているのが、ラサントラル／ギャラリー・パワーハウスだ。これは、まさに、既存の文化体制では評価されない、アーティストたちとその取り組みが、「存在する権利」を獲

得することをめざしている。ラサントラルは、一方で運動的な側面から、他方で公共的な側面から、女性たちのアートの活動を支える取り組みを行ってきた。しかしながら、管見では、ラサントラルがケベックのフェミニズムとアートの歴史の中に、十分に位置づけられていたとは言い難い。例えば、アンナ・ルピアン（Anna Lupien）の『台所からスタジオへ De la cuisine au studio』は、3世代にわたる女性アーティストたちの歴史をまとめており、70年代において、ラサントラルが女性たちのアート活動にとって重要な拠点であったとしつつも、それ以上は言及されていない。先の『ケベックのフェミニズム思想史論集』では、ラサントラルの設立メンバーの写真は掲載されているが、テキストは取り上げられていない。ラサントラルについて、最も詳しい記述は、シェーナ・ゲールレイ（Sheena Gourlay）の博士論文「ケベックにおけるフェミニスト／アート 1975-1992 *Feminist/Art in Quebec 1975-1992*」において、ラサントラルが『定まらない—主体の問題 *Instabili : la question du sujet*』<sup>1</sup>によって生み出したフェミニズム・アートに関する言説を、90年代のケベックのナショナリズムと、フェミニズムという文脈の中で、分析した研究があるのみだ。

ラサントラルに関する直接的な研究がないことの理由に、ラサントラルの対外連携が、女性やフェミニズム系の団体よりも、アートに関する団体との方が強かったことが考えられる<sup>2</sup>。さらに、ラサントラル自身が、フェミニズムの影響を受け、それとともに展開してきたとしながらも、社会政治的プロジェクトである、フェミニズム運動とは一線を画し、とりわけ70年代の一部のフェミニストたちの教条主義化に対して批判的だったことも理由の1つとして考えられるだろう。しかし、ラサントラルをケベックのフェミニズムの文脈に位置づけ直すことは、ケベックのフェミニズムが、フランス語文化と英語文化の双方の影響を受けながら展開していたことを明らかにするとともに、文化芸術における性差別に対して、理論的かつ実践的に、挑戦していたことを確認することになる。

### 3. ラサントラルの設立とその目的

ラサントラルは、1973年に5名の女性アーティストたちによって立ち上げられた<sup>3</sup>。設立当時、女性がアーティストとして生きていくことは極めて困難だった。アート界は、男性優位的な市場競争原理が支配し、女性であることは、作品の評価以前にアート界のミソジニーのために不利であった。ま

た、彼女たちは、キャリア教育を受けていないために、このような社会で生きていく術がなかった。そこで、女性でアーティストをめざしながらも、それをあきらめるか、趣味程度に続けるか、大学に残るか、いずれかを選択せざるを得なかった。そうした状況に疲弊した女性アーティストたちが、他の女性アーティストたちに、女性とアートについてディスカッションを呼びかけたところ、集まってきた女性たちがいた。それが、ラサントラルの始まりだった。彼女たちは、それぞれの困難や悩みを共有し、作品を発表することが出来る場所を持つ、ということを決めたのである。そして彼女たちは、モントリオール市内のグリーン・アヴニュー（Greene Avenue）に場所を借り、自分たちで壁を塗り、大工仕事をして、ギャラリーを立ち上げた。その後、ラサントラルは、引っ越しを繰り返し、現在はブルヴァール・サンローラン（Boulevard Saint-Laurent）にギャラリーを構えている。

設立時の目的は、何よりも、女性たちに作品展の機会を与えることだった<sup>4</sup>。それは、女性アーティストたちの作品を、客観的に評価し、モチベーションを維持し続けることにつながる。女性たちの創作活動の可能性に依拠し、ジャンルと市場での商品価値にこだわることなく、作品を展示し、より多くの人が、観覧できる機会を設けることをめざした。

当時は、必ずしも、目的や活動の規約などは、文書化されていなかった。1990年に、これまでの経験や活動を省察し、規約が作られた。しかし、その末尾に「必要に応じて変更される」とあるように、幾度も書き換えられる。後述するが、2007年には、あらゆる関係者の協力を得て、ミッションの変更に取り組んだ。これまで、「女性たちのアートの普及」としていたが、ラサントラルの現実と十分に一致していなかった。そこで、アンケートやミーティングを通して、新たなミッションではなく、これまでの取り組みを言語化した。そこで、現在のラサントラルのミッションは、「フェミニズム・アートの実践の歴史の展開に尽力し、既存の文化的制度では取り上げられることが少ないアーティストたちと、活動の可視化を支援することである」（ラサントラル公式ホームページ <http://www.lacentrale.org/> 2012年12月30日最終閲覧）。また、その目的については、次のように述べられる。「フェミニズムのディスカール、ジェンダー理論、文化的多様性、トランスディシプリナリーを備えた現代アートにおける言語活動のためのプラットフォームを提供することである。そのために、地域、国内、国外にわたる専門的な交流のネットワークを展開することも重要である。センターは、世代間交流を可

能とするために、全てのキャリアの段階にわたって、アーティストたちを支援する」。このように、男性中心主義的なアート界で周縁化されていた女性アーティストたちの創造性への信頼を出発点に、フェミニズム運動とその理論とともに展開してきたラサントラルは、現在、その歴史を受け継ぎつつ、メインストリームからは排除された文化の発展に貢献することを目指す。

ラサントラルの主な活動は、アーティストたち自身によって企画される作品展である。運営メンバーたちは、審査を通過した企画の準備を、アーティスト（たち）とミーティングを重ねながら進める。過去には、審査を通過しなかった作品や、メンバー自身の作品を展示する小規模のスペースや、パフォーマンス・アートのためのスペースを設けていた。また、ケベックのフェミニスト・ソングのコンサート会場の1つとなり、先のニコール・プロサールによる朗読会も開かれた。さらに、レズビアン・フェミニズムのためのカフェを開いたこともある。現在も、作品展だけではなく、音楽、ビデオ・アートの上映会、パフォーマンス・アートのイベントなども開催し、また、地域と連携したアート・イベントへの出店も行っている。ギャラリーの財政状況、社会や政治的状况、フェミニズム運動の動向の影響を受けながらも、ラサントラルは、設立以来、多様なアートのジャンルを通して、様々なアイデンティティをもち、異なる現実を生きる女性たちが集い、出会い、表現する場となっている。

対外関係としては、1976年から、政府からの助成金を得ることで、女性のアート施設として、その必要性が、公的に認められることになる。また、1992年、アーティスト・ラン・センターのラウンドテーブルに参加する。以降、ケベックのアーティストの地位向上と、アートの展開のために、女性アーティストによる自主運営組織として、発言の機会を得ていくことになった。

#### 4. 具体的なアクションとしての出版

##### 4.1. ラサントラルの活動の柱としてのテキスト

ラサントラルは、現在に至るまで、8冊のドキュメントを出版している。そのうち、『定まらない—主体の問題』『テクスチュラ *Textura*』<sup>5</sup>『フェミニズム・エレクトロニック *Féminismes électroniques*』<sup>6</sup>の3冊は、フェミニズムをめぐる今日的な課題とアートをめぐる思索についてのエッセイと、ラサントラル自身についてのテキスト、さらにラサントラルの活動年表をまとめ

ている。それぞれ10年おきに出版されており、フェミニズムとアートの喫緊の問題を論じるだけでなく、ラサントラルの歴史を客観的に省察する機会ともなっている。また、『レサントレル *Les Centrelles*』<sup>7</sup>では、作品展の背景でほとんど聞かれることのない、過去のメンバーも含む運営メンバーたち、すなわちサントレルたちの声をまとめた。その他のドキュメントは、展示会の内容を踏まえた、現代アートとジェンダーに関する批評的なエッセイを収録したものである。このような、アーティストやメンバー自身による、ラサントラルで実施された作品展への批評は、出版活動が始まりではない。ラサントラルは、設立時より、ニュースレターを発行し、作品展の紹介、ラサントラルの活動や講座の予定を案内していた<sup>8</sup>。そのニュースレターは、徐々に、作品展の紹介も、単にコンセプトや場所などを説明するだけでなく、アーティスト自身によって記事が書かれ、また、終了したものについては、レビューや批評が書かれるようになった。このように、ラサントラルのアートに関するテキストによる言論活動は、設立当初から、継続的に行われていたことがわかる。

こうした言論活動は、ラサントラルという組織の展開と無関係であったとは考えられない。上述の現在のミッションへの改正は、ラサントラルで展示される作品が、もはや、フェミニズム言説によって説明することが不可能になりつつあること<sup>9</sup>、またメンバーやコーディネーター自身が、「フェミニズム」という言葉に違和感を覚えつつあったことが背景にある<sup>10</sup>。そこで、これまでにラサントラルに関わった女性たちにアンケート調査を実施し、ミーティングも開いて、関係者たちの声を入念に収集した結果、実施された。すなわち、新たなミッションを作ったというよりは、ラサントラルの蓄積された知見と現実を言語化し直したのが、現在のミッションと言える。このラサントラルの蓄積された知見とは、必ずしも、運営上の経験や知識だけを指すのではない。むしろ、既存の文化制度における権力と知に対して、問いを投げかけることで、生み出された言説である。

#### 4.2. 主体に関する考察

以下で、ラサントラルが生み出した言説の中でも、活動の思想的軸となるテーマについて論じる。『定まらない』は、ラサントラルが最初に出版した、フェミニズムとアートに関する考察のエッセイ、ヴィジュアル・アートの作品、ラサントラルの歴史に対する省察的エッセイ、活動年表からなる。フェ

ミニスト・アートは、視覚的实践とテキスト的な実践から生み出される言説であると見なす、シェーナ・ゲールレイは、本書のタイトルである「定まらない」の意味を次のように定義する。

「こうした様々なエッセイが明らかにしていることと、アーティストたちの視覚的／テキスト的な実践が包括していることは、議論のテーマとしてや、眼差しの対象としてではなく、見る者が批判的にコミットするよう求められている作品における、ポジションとしての、主体の立ち位置である」(Gourlay, p. 257)。

本書のエッセイやアート作品が喚起する、イメージとテキストの関係、女性と表象の関係、またはそれぞれの作品との関係にある不安定さは、男性であれ、女性であれ、見る者が、批判的な主体として、それぞれのイメージまたはテキストに向き合うことを促す。

それは、『トランス・ミッション *Trans・mission*』でも引き継がれている。ニコール・ジョリクール (Nicole Jolicœur) とロラ・ルフアーヴ (Laura Lefave) による、E-mail を通じたやり取りという形式を取った、シルヴィ・ベランジェ (Sylvie Béranger) の展示会「沈黙からの発信… *Émettre du silence...*」(1995年9月7日～10月8日) についての批評テキストを例として取り上げよう<sup>11</sup>。ベランジェのビデオ・アート作品は、小部屋の中で身体の一部を画面に映し出す作品だ。見ること一見られること、発話—沈黙、という二項対立的な関係の間にある力学を、小部屋の床に円形に投影された複数のイメージと大きく壁に投影されたイメージとして写し出された、口や耳などの顔面のパーツによって、現出させる。この作品は、近代主義的な主体を脱構築しているのだが、ルフアーヴと、ジョリクールという、作品の読み手自身も、徐々に自らの主体の確かさを失っていくのである。けれども、文字通り、2人はE-mailのやり取りを通して、互いに言葉を掛け合いながら、パソコンの画面の前に、存在し続けるのである。女性と表象に関する問いから出発した、主体の問題についての考察は、客体や主体という非対称な二項対立的関係を超えて、自律した主体を立ち上がらせる。作品を読み取る側の主体というもの、常に作品との関係の中で揺れ動く。主体が不安定であるにもかかわらず、自律した存在であり続けられるのは、ルフアーヴとジョリクールの例のように、ともにその作品を読み解こうとする、他者がいるから

だ。

#### 4.3. 既存の文化における意味付けを書き換える

2000年に出版された『テクスチュラ』の冒頭のエッセイ「テクスチュラ」で、スザンヌ・ドゥ・ロトビニエール＝ハーウッド（Susanne de Lotbinière-Harwood）は、ニコール・ブロッサルをはじめとする女性作家たちの仕事、家父長のかつ異性愛主義によって排除されている女性性を、言語の中に組み込むこと、すなわち、既存の文化を変える試みであったとしている。そして、ラサントラルを、その延長線で捉える。

女性性で話すということは、メインストリームの意味に抗うということ、それは、女性たちが聞き届けられる場を整えるということ！—社会において、そしてより広義の意味で、社会的なことにおける、意味の貢献者としての女性たち。そして、まさにここで、意味の空間の概念において、評価をすることにおいて、そして意味（meanings）が生み出され、問われ、また作り出されるというプロセスの政治化において、フェミニズム・アート／女性性のアートの場としてのラサントラルは、重要になって来るのである。フェミニズムのプロジェクトとして、同時に、女性性のプロセスとして捉えられるラサントラルは、その存在と組織の形によって、ジェンダー、権力、意味と感性に、問いを投げかけるのである（Gourlay, Sheena, et Susanne de Lotbinière-Harwood « Textura : l'artiste écrivain » TX, pp. 7-8.）。

創作活動において、女性性を出発点とするということは、創造の起源に、生物学的な女性の生殖機能を結び付けて、女性を創造者とするのではない。むしろ、既存の文化制度から排除されている価値観や視点を出発点とすることが、新たな文化を生み出す契機となるのだ。

だから、「フェミニズム・アートは、1つの場であり、それは、またそれによって、私たちを取り巻く文化的かつ社会的なあらゆる意味（meanings）に立ち入り、この場から批判し、この場が、未知の意味、未知の知を解き放つ（私たちが織りなしている）新たなテキストを生み出すのだ」（Gourlay et de Lotbinière-Harwood, TX, p. 6）。

ラサントラルの場合、テキストを織りなす行為は、ギャラリーという物理的な空間における展示と、出版という文字通り「テキスト」を公共空間に送

り出すこと、この2つの側面を持っていると言える。そして、この2つは、ある特定の枠組みの中で、意味を生み出すという行為であることにおいて、共通している。

作品展という、アーティスト自身がギャラリーの中に広げた1つのフェミニズム・アートの場では、見る者が、そこからあらゆる意味を読み取り、批判し、そして自分なりの意味付けを行なう。例えば、フランス・ロブソン (Frances Robson) 「古のダンスの記憶… Souvenirs d'une dance ancienne…」 (1996年2月17日～3月17日) の例を見てみる。アーティスト自身によって展示会の説明がされ (« Movements, Memories, An Ancient Dance » TM, p. 96)、ジェニファー・ゴンザレス (Jennifer González) という別のアーティストが批評を書いている (« Iconographic Gestures » TM, pp. 94-95)。アルジェリアの伝統的なダンス、ベリー・ダンスを踊る身体は、社会的、歴史的な文脈を変えるとどのように表象のされ方が変わるのか。アルジェリア出身でカナダ在住の写真家ロブソンは、踊る身体を各国で撮影した。ベリー・ダンスは、ロブソン自身によれば、歴史的にも、彼女自身の経験的にも、また他の女性支援で用いられている実践例をとっても、女性たちの生の解放を可能にする身体的実践である。しかし、こうしたベリー・ダンスの可能性は、文脈によって、女性たちの抑圧の道具として歪められる。例えば、ある文脈では、性的誘惑の道具となり、またある文脈では、モデルのような身体を作るための商業化されたエクササイズとなる。一方で、ゴンザレスは、この展示会を通して、踊る身体が社会的関係性の中で構築される過程だけではなく、写真というメディアを用いること、さらには、展示会の配置によって、私たちの視点が、いかに他者を社会的に構築していくかが炙り出されることを指摘する。つまり、一度この写真展の作品と向き合うことは、見る者自身の、眼差しそのものが、踊る身体と表象の関係に関する問いの中に投げ込まれるのである。そして、作品から、問いを引き出し、答えようとする行為が、新たな意味付けの行為なのである。

#### 4.4. エンパワーメントというプロセスの場としての「テキスト」

ラサントラルの作品展は、準備のために、度重なるミーティングが開かれ、「ギャラリーと、メンバーたちそれぞれのプロフェッショナルな作品の意味を十分に描き出すような展示の形式を探求」する「過程」を経て実現される。それは、メンバーたちにとって、「アート実践に本来的にねざす孤独を壊

し」、彼女たちの「繋がり」に意味を与え直」す、プロセスでもある (TX, p. 23)。競争主義的なアート界において、アーティストたちは個別化されるが、ラサントラルが模索するアートの空間とは、他者と出会い、繋がる空間である。先の、ロブソンの「古の記憶…」の場合は、一方でこの作品展の意味をロブソン自身が言語化し、他方でゴンザレスが、写真というメディアと身体の関係性を、間文化的かつジェンダーの視点から、作品展全体を通して読み解いた。しかし、この写真展の最後に、ロブソンがアルバムのような形で写真やテキストをコラージュしたセクションについては、読者に解釈を委ねる。作品展というフェミニズム・アートが生まれる場において、アーティスト、見る者、そして読者は、対等な批評者であり、作品展から新たな価値を引き出す協働者なのである。

また、モニック・レジナルド＝ゼイバール (Monique Régimbald-Zeiber) は、書くという実践によって、自分が絵画の創作活動に埋没し、孤立化することを避け、自分のアート実践に対して一定の距離を取ることが出来ると言う。彼女の『テクスチュラ』に収められた「大昔 (la belle Lurette)」という一連の作品は、彼女自身が、「2つの声をもつテキスト」と呼ぶように、視覚的かつテキスト的な実践である。小文字や大文字、文字のフォーマットの変化や色を用い、時に一切句読点を挿入しないテキストを含んだ、9編のテキストからなる。その中の「2人のステップ (Pas de deux)」 (TX, p. 12) という散文詩は、「2つもしくは複数の声による実践」の可能性をうたっている。「2とは、発話と聴くこと / 2とは、出会いであり、「生成」 / 2は、他者を承認する / 2は、互いに承認し合う / (...) / 2は、ディスクールの具体性にとって好ましい状況を創る 1つの方法であり、作品の論証的な可能性を明らかにする 1つの方法 / (...) / 2は、第3の空間の創出であり、個性崇拜を沈黙に伏す」。ここでの「2」という関係性の概念が示す創造性とは、抽象的な関係のあり方にとどまっていない。自律した主体どうしが、互いの発話を聴き合い、受けとめ合う対話を繰り返すことを通して、両者がひとりの自律した存在として受けとめ合い、共同体を形成し、具体的な空間を創っていくプロセスそのものなのだ。作者は、この対話的なプロセスを、「友人たちとの長い散歩道を通しての会話」とも例え、それは「自由と、美と時間の心地よさ」と、「喜び」を与えると言う (TX, p. 11)。

このように、フェミニズム・アートという場は、アーティストだけでは、存在することができない。見る者がいるからこそ、この場は、創造的な空間

となるのだ。ラサントラルにおけるフェミニズム・アートとは、ジェンダーや権力を問い直し、新たな意味を生成するためのヴィジュアル的かつテキスト的な実践を行うパートナーである、アーティスト、観者、メンバーによって構成される、1つの共同体と捉えることができるだろう。そして、テキストとは、一方でこのコミュニティ全体が、新たな現実を生成していくための言葉を獲得するプロセスであり、他方で、個々の実践を省察し、新たな実践を生み出すためのプロセスである。

#### 4.5. 「現場」としてのラサントラル

これまで見てきたように、ラサントラルにとって、出版活動とは、それぞれの出版物を個別のプロジェクトとして細分化して捉えるよりも、ラサントラルのミッション、すなわちフェミニズム・アートの実践の歴史の展開をなす1つのプロセスと言えるだろう。そして、ある限定された空間に固定された「現場」なのではなく、テキストは、あらゆる時間と空間を横断し、生成と変化に富んだアクチュアルな「現場」なのだ。ラサントラル自身は、出版を次のように位置づけている。

「[ギャラリーで] 展示しているアーティストたちが、息長く活動を出来るようにすること。出版物は、書き手たちに、アーティストの活動のあらゆる論点に関して、さらに言えば、女性たちの今日的なアートの論点について、より多くの省察を展開することを可能にする。これらの出版物は、アーティストたちの記憶を保障する。それらは、時間のなかに刻み込まれ、同様に、ラサントラルに展示された作品の永続性の一部である」(« La Centrale », TX, p. 130)。

このように、ラサントラルの展開と、作品展やアートをめぐる考察からラサントラルの歴史の省察を含めたりフレクシオンは、切り離して考えることができない。アクションは、思想的軸を支えに展開し、ラサントラルにおける思索的な活動は、アクションがあって、初めて現実的な意味を帯びる。このアクションとリフレクシオンの相互に影響しあう関係が、ラサントラルという場を、創造的な場としている。この、ラサントラルの創造性とは、4つの意味を持つ。1つ目は、フェミニズム・アートの実践を生み出すということ。2つ目は、ジェンダーを含む既存の知と、権力に対して問いをなげかけ、

新たな文化を生み出す言語活動を行うこと。3つ目は、このような、アートのかつテキスト的な実践を行う当事者を形成するということ。4つ目は、創造的主体としての人々と、この人々が集う空間が置かれている社会的歴史的状况との相互的な影響関係の中で、フェミニズム・アートの実践の展開と、既存の文化制度から周縁化された取組みの可視化という使命のために、展開しつづけるということ。

最後に、この現場としてのテキストの担い手について、言及したい。

そこに流れているエネルギー、考え、プロジェクトの量は、ラサントラルから、感動する場所を生み出す。たとえ今以上に停滞的な時期でも、いつでも誰かがすべてをかき混ぜて片を付けることになる (LC. P. 17)。

ラサントラルは、一見停滞しているかのように見えても、その内部で、メンバーやアーティストたちの様々な思索、メンバーやアーティスト間の、または他のコミュニティとの協働的關係のもつ創造性、サントレルたちの持つ様々な知、そして、アート実践の数々が、脈々と流れているのである。その意味で、現在のメンバーだけではなく、立ち上げメンバーやアーティストたちの存在は、「過去」のものなのではなく、現在進行形で、ラサントラルを創っているのである。現在のメンバーが、立ち上げメンバーたちに出会うことは、ラサントラルという共同体に属す自分たちが持っているはずの知を、引き出したのである。ラサントラルが継承する最大の「遺産」とは、立ち上げから今に至るまでの「サントレルたち」なのだ。このサントレルたちが、フェミニズム・アートの実践と、それをめぐる思索と省察を通して、フェミニズムという視野から、不均衡な権力の関係性を組み替えて、共に生きる方法を探求し、編み出してきたのである。

結びにかえて—サントレルとは

サントレルとは一体誰なのだろうか？ラサントラルが、組織化を強めていく中で、サントレルたちは、ギャラリーの活動を背後で組織する事業推進者であり、ギャラリーが円滑に運営されるための影のスタッフとなりつつあった (LC, p.29)。しかし、「私たちは自分たちで必要にあわせて船を変えることのできるだけのたくさんの道具を持っているのだ」という気づきは (p. 51)、ラサントラルを自分たちの望む空間にしていくために、そして、今日の社会

に蔓延するシニズムに抗うために、ラサントラルでの活動を企画し、運営していくことになるのだ。そのサントレルとは、当時のコーディネーターだったキャトリーヌ・ボドメール（Catherine Bodmer）の言葉を借りれば、「私が経験したラサントラルという生の始まりを、私たちが共有した、そして、私たちが継承していくことになる（といいなと思う）、様々な夢と、様々なユートピアを、証言し、伝えていく」主体なのである（LC, p. 52）。こうした、創造し、発信する主体としてのサントレルたちの集合体を表す、「共同体 collectif」という概念は、今日的文脈において、1つの夢、理想、言説によって説明されるそれではなく、自律的な存在であるサントレルたちの、多種多様なプロジェクトが、有機的につながっているもの、として定義され得るだろう。

女性たちによる自主運営とは、単に女性たちが管理・運営することではない。自律した存在である女性アーティストたちが、フェミズム・アート、または女性性を軸としたアートを実践する場を協働で創り、それによって社会と文化を書き換える営みのことである。ラサントラルは、フランス語で、発電所を意味するように、女性たちのアート実践の可能性を発信し続けながら、女性たちの力を引き出し、新たな社会の創造のための力を生み出す。まさに、「パワーハウス」なのである。

（やうち ことえ 早稲田大学大学院博士後期課程）

## 注

- 1 以下、引用の際は、IN と略す。
- 2 2013年3月15日に筆者によって実施されたラサントラルのコーディネーター、ディアヌ・サン＝アントワヌ（Diane St-Antoine）とのインタビューによる。
- 3 以下のラサントラルの設立過程は、『定まらない』に収録された、ジョアンナ・ナッシュ（Joanna Nash）「モンリオールのパワーハウス・ギャラリー Montréal's Powerhouse Gallery」を参照した。
- 4 ラサントラルに関する資料は、コンコルディア大学が所蔵する。この記述に関しては、設立当時の資料を参照しているが、正確な日付は不明である。
- 5 以下、引用の際は、TX と略す。
- 6 以下、引用の際は、FE と略す。
- 7 以下、引用の際は、LC と略す。

- 8 コンコルディア大学には、1973年から1983年までのニュースレターが所蔵されている。
- 9 « Transmission : Le projet collectif » texte à plusieurs mains, dans Racine, Danièle et al. (1996) *Trans • mission*, Montréal, Les éditions du remue-ménage, pp. 23-24. なお、以下は引用の際、*Trans • mission* は TM と略す。
- 10 Bodmer, Catherine « Décentraliser La Centrale ? » LC, pp. 48-49.
- 11 Jolicoeur, Nicole, et Laura Lefave « Émettre du silence... » TM, pp. 68-73.

## 参考文献

- Bouchard, Gui (1991) « Typologie des tendances théoriques du féminisme contemporain » *Philosophiques*, vol. 18, n° 1, pp. 119-167.
- Dagenais, Huguette(1994) « Méthodologie féministe pour les femmes et le développement. Concepts, contextes et pratiques », dans Labrecque, Marie Francine., (dir.), *L'égalité devant soi. Sexes, rapports sociaux et développement international*, Centre de recherches pour le développement international, pp. 258-290.
- Descarries, Francine et Roy, Shirley (1988) « Le mouvement des femmes et ses courants de pensée : Essai de typologie » Document de l'ICREF, Ottawa : Institut canadien de revue sur les femmes, n° 9.
- Dumont, Micheline et Toupin, Louise (2003) *La pensée féministe au Québec : Anthologie 1900-1985*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.
- Lamoureux, Ève (2009) « Le féminisme en art », dans *Art et politique : nouvelles formes d'engagement artistique au Québec*, Montréal, Les Éditions écosociété, pp. 66-74.
- Les Têtes de pioche, Collection complète*, (1980) Montréal, Les éditions du remue-ménage.
- Lupien, Anna (2013) *De la cuisine au studio*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.
- Sheena, Gourlay (2002) *Feminist/Art in Quebec 1975-1992*, A Thesis in The PhD in Humanities Program Presented in Partial Fullment of the Requirements for the Degree of Doctor of Phisolophy at Concordia University, Montreal.
- Toupin, Louise (1997) « Les courants de pensée féministe. Version internet ». [Version revue et augmentée du texte paru sous ce titre dans “Qu'est-ce que le féminisme ?”, Trousse d'information sur le féminisme québécois des 25 dernières années, Montréal, Centre de documentation sur l'éducation des adultes et la condition et Relais-femmes, <http://netfemmes.cdeacf.ca/doments/courans0.html> (2011年2月22日閲覧)]

## ラサントラル関連資料

- Fraser, Marie, et Lesley Johnstone (dir.) (1992) *Instabili : la question du sujet*, Montréal,

Artextes.

Gauthier, Annie (dir.) (2000) *Textura :L'artiste écrivain*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.

Gauthier, Annie (dir.) (2001) *Pink link ou la proposition rose*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.

La Centrale (dir.) (1996) *Trans • mission*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.

La Centrale (2004) *Les Centrelles*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.

Leila, Pourtavaf (did.) (2012) *Féminismes électroniques*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.

Racine, Danièle (dir.) (1997) *Voix singulières : Réflexion sur l'art actuel des femmes*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.

Racine, Danièle (dir.) (1998) *Multiplier : Points de vue sur l'art actuel des femmes*, Montréal, Les éditions du remue-ménage.